

虹

扶桑社通信
平成18年7月



教室で使ってみた扶桑社の歴史教科書

栃木県内の使用校の先生より

今年4月から扶桑社の「新しい歴史教科書」を使用している感想を述べてみたい。

第1に、我が国独自の文化に見られる日本人の心や先人達の努力に触れることによって、歴史を学ぶことの意義を理解させるとともに、我が国の歴史に対する深い愛情を培うように編集されているということである。

例えば、縄文文化の記述には「このころ、南方からも日本人の祖先となる人々がやってきた。東南アジアに住み着いた人々は島から島へと丸木船で移動する航海術を身につけた。やがて人々は黒潮に乗って日本列島にたどり着いた。アフリカを出てから、はるかな旅の末に、二つのアジア人の流れは、この列島でふたたび合流した」とあり、まず「日本人」のルーツを説明している。

そして、氷河期の終わりとともに、日本列島全体が緑の森林で覆われたことに触れた上で、「日本列島は食料にめぐまれていたので、人々は大規模な農耕や牧畜を始めるにはいたらなかった。」「自然と調和して生活した約1万年間の縄文時代には、日本人のおだやかな性格が生まれ、多様で柔軟な日本文化の基礎がつくられたという側面もある。」とし、「日本人のころ」のルーツを説明している。多くの教科書が、縄文時代と弥生時代を合わせて1単位時間として扱っているのと比べてみても、「日本人のころ」に触れることで我が国の歴史に対する

愛情を培おうとする編集意図が伺えた。

第2に、1時間ごとの題材名に通し番号をふったりして、通史としての歴史の流れを明確にしているということである。章の扉となるページには、100年を1cmとする歴史物差しを掲載し、日本の歴史全体の流れをつかませるような工夫がなされ、生徒の理解を深める上での一助となっている。

第3に、巻頭の「日本の美の形」をはじめとして、各ページに、我が国の歴史的な文化遺産を紹介する写真資料などが多数掲載され、生徒の興味・関心を高めるのに役立っているということである。例えば、「日本の美の形」に掲載されている土偶、埴輪、仏像等の彫刻は、その解説にもあるように、その時代の日本の表現技術の高いレベルを示すものであり、そのダイナミックな掲載法と相まって、生徒に強い衝撃を与えたと思う。

最後に「歴史の名場面」や「読み物コラム」では、神話の世界や歴史上の人物、時代の一場面を詳しく紹介したりして、諸外国の影響を受けながらも、我が国独自の文化を形成してきた先人達の努力が理解できるように工夫されていると感じた。

最後に、「新しい歴史教科書」を使用し始めてまだ2ヶ月も経過していない。感想等もこの2ヶ月に満たない期間におけるものであることをお断りしておく。

中国社会科学院との

「扶桑社版歴史教科書」をめぐる対話

去る5月17日、都内のホテルで中国政府直属のシンクタンクである中国社会科学院日本研究所の蔣立峰所長ほか5名の研究員と、日本側研究者が「日中の歴史認識」について対話する機会があった。

当社の歴史教科書に関しては、文部科学省の検定を経ているにもかかわらず中国、韓国からの批判があり、その真意について中国の要人と直接話をする良い機会であったので、他のマスコミ関係者とともに当社の担当者も参加した。

まず、日本側から次のような前提条件が提起された。

(a) 世界各国の義務教育の歴史教科書で共通して言えることは、「愛国心と国民の自覚を養うこと」を目的としており、中国でも同様であること(北京の



人民教育出版社が発行している「中国歴史」は、その傾向がさらに徹底されている)。

(b) これまで日本だけが、例外的に逆のベクトル(方向性)が働いていた。つまり、自国の歴史を否定的に捉える歴史教育の横行である。

(c) 扶桑社の『新しい歴史教科書』は、上記(b)が主流だった中で、文科省が定める学習指導要領に忠実に則り、(a)の立場に即した教科書を作ったということ。

以上の(a)～(c)に関して、中国側からまったく異論が出されなかった。

次に、八木秀次氏(元・新しい歴史教科書をつくる会会長)が昨年12月に中国社会科学院日本研究所

を訪ね議論した際の中国側の主な批判のポイント(雑誌「正論」3月号、4月号所収)を3点に絞り、当社の教科書の記述が実際にどうなっているかの検証発表が行われた(右表の①～③参照)。

①「日本が『神の国であること』を強調している」については、「国の成り立ちが古い国には神話があり、どの国でもそれが教科書に載っており」、「この教科書でも神話を載せているが、神話は神話として、歴史は歴史として、神話と歴史をはっきり分けて記述してある」と発表された。

②「日本文化の独自性とその優れた点を強調しすぎている」については、唐の先進性や、文化の上でも唐に学んでいることが、実際に記述されていることが説明された。

③「日中戦争における日本ならびに日本軍隊の加害性について何も書かれていない」については、右表のように記載されていることが述べられた。

以上の①～③に関しても、異論はなかった。

この検証発表に基づきその後、活発な議論が行われたが、中国側の最大にして唯一ともいえる批判ポイントは、「勇気をもって日中戦争は侵略戦争だったと書きなさい」という点であった。

当社の教科書では、編集方針として、ありとあらゆる戦争に侵略戦争という用語を用いていないとして、その理由は、

(1) 侵略である戦争と、そうでない戦争を区別しにくいこと、

(2) 戦争が起きるにはさまざまな要因が重なっており、裁判にたとえるなら、一方的に検事が「侵略戦争だ」とレッテルを貼り糾弾するのではなく、弁護士の「言い分」も聞きながら、最終的には歴史を学習する生徒が考えること、という説明が行われた。しかし、この点については議論がかみ合わなかった。

国が異なる以上それぞれの立場があり、歴史認識の完全なる一致はありえないであろう。しかし、歴史認識において中国要人がどう考え、その差が何であるのかの確認が出来たことは意義が大きかったと言える。

(文責=扶桑社・書籍編集部[教科書事業担当])

扶桑社版歴史教科書に対する 中国社会科学院の批判ポイント(上段)と実際の記述(下段)

1 「日本が『神の国であること』を強調している」

実際の記述 ⇒ p.30

タイトル「神武天皇の東征伝承」

文中記述「初代天皇とされる神武天皇をめぐる物語である。」

「『日本書紀』に収める神武天皇の物語は……」

「……理想をこめてえがきあげたのが、神武天皇の物語だったと……」

◎ **神話を伝承・物語として記述。神話と歴史をはっきり分けて記述。**

2 「日本文化の独自性とその優れた点を強調しすぎている」

実際の記述 ⇒ p.38

「唐は、隋の制度を引きつぎ……よく整備された国家の制度をつくりあげた。日本からは、遣隋使に引き続いて遣唐使が派遣され……唐のすぐれた制度を学んだ」

「唐の進んだ政治制度を伝えたことも、改革の気運を高めた」

◎ **日本の国作りにおいて唐の先進性に学んだことを明記。**

実際の記述 ⇒ p.48~49

「朝廷は遣唐使を派遣し、文化の移入に努めた。」

「唐の高僧の鑑真は、5度の渡航の失敗と失明を乗り越えて日本に渡り、仏教の戒律を伝えた。」

「唐の文化の影響を取り入れながら、高い精神性をもった仏教文化が花開いた。」

◎ **文化の上でも唐に学んだことを明記。**

3 「日中戦争における日本ならびに日本軍隊の加害性についても何も書かれていない」 「日中戦争について都合の良い記述をしている」

実際の記述 ⇒ p.199

「1937(昭和12)年7月7日夜、北京郊外の盧溝橋で、演習していた日本軍に向けて何者かが発砲する事件がおきた。これをきっかけに、翌日には中国軍と戦闘状態になった(盧溝橋事件)。事件そのものは小規模で、現地解決がはかられたが、日本側も大規模な派兵を決定し、国民党政府もただちに動員令を発した。こうして以後8年間にわたる日中戦争が始まった。」

◎ **盧溝橋事件についても日本の学界の通説を紹介。**

側注「このとき、日本軍によって、中国の軍民に多数の死傷者が出た(南京事件)」

◎ **南京事件の実態について正確に記述。**

実際の記述 ⇒ p.200

「中国との戦争が長引くと、国をあげて戦争を遂行する体制をつくるため……」

「中国大陸での戦争は長期化し……和平工作の動きもあったが、戦争継続を求める軍部の強硬な方針が絶えず優位をしめた。」

「……斎藤隆夫代議士は、帝国議会で「この戦争の目的は何か」と質問したが、政府は明確に答えることができなかった。」

◎ **日中戦争に対する日本政府の様子を率直に記述。**

実際の記述 ⇒ p.206~207

「この戦争は、戦場となったアジア諸地域の人々に大きな損害と苦しみを与えた。とくに中国の兵士や民衆には、日本軍の侵攻により多数の犠牲者が出た。」

「しかし、日本の占領地域では、日本語教育や神社参拝などをしたことに対する反発もあった。連合軍と結んだ抗日ゲリラ活動もおこり、日本軍はこれにきびしく対処し、一般市民も含め多数の犠牲者が出た。また、戦争末期になり、日本にとって戦局が不利になると、食糧が欠乏したり、現地の人々が過酷な労働に従事させられる場合もしばしばおきた。」

側注「そして、大東亜共栄圏の考え方も、日本の戦争やアジアの占領を正当化するためにかかげられたと批判された。」

◎ **加害性を含め歴史事実を記述。**

実際の記述 ⇒ p.208

「また多数の朝鮮人や中国人が、日本の鉱山などに連れてこられ、きびしい条件のもとで働かされた。」

◎ **歴史事実を記述。**

実際の記述 ⇒ p.214

読み物コラム「日本軍も、戦争中に侵攻した地域で、捕虜となった敵国の兵士や民間人に対して、不当な殺害や虐待を行った。」

◎ **歴史事実を記述。**



扶桑社の本棚

マンガ 日本の問題【内政編】【外交編】

日本が抱える問題の本質を、わかりやすく解説した画期的なコミックが完成! 現在、わが国が直面する問題が、一時間でわかります。

【内政編】

とあるバーに集う4人の男女。ひきこもりの娘と認知症の母を抱え、妻との折り合いも悪くなっていく中年サラリーマン。ベンチャー企業で成功を収めたように見える青年。シングルマザーのキャリアウーマン。何にも興味を持たないようなフリーター。そんな彼らの間で交わされる会話には、年金問題、少子高齢化社会、地方自治など……日本の問題が凝縮されていた。



【外交編】

中国や韓国の留学生が課外ゼミという名目の飲み会で、日本の学生や教授との間で議論する日本の外交問題。靖国参拝、歴史認識、経済摩擦など……それぞれの立場の違いがクローズアップされる。竹島を知らない日本の女子大生が韓国の留学生から独島を教わる展開もユニーク。日中・日韓・日米の間に横たわる日本の外交問題の本質が見えてくる。



屋山太郎 ◆ 監修
剣名舞 ◆ ストーリー

武下純也 ◆ マンガ【内政編】
久松文雄 ◆ マンガ【外交編】

定価 各**1,000**円

各紙誌絶賛! 『産経新聞』(5月29日) 『週刊新潮』(6月8日) 『フジサンケイビジネスアイ』(6月12日)

日本の抱える内外の問題をマンガで解説!

お詫び

2006年3月、文部科学省が実施いたしました緊急調査により、当社「中学社会 新訂版 新しい公民教科書」においても、5箇所ミスが発見されました。採用校をはじめとする関係各所には、すでに正誤表を配布しておりますが、正誤表は当社ホームページにても、ダウンロードすることができます(pdf形式)。今後は、このようなことがないように、十分な校正・確認を行っていく所存でございます。何卒、ご寛恕のほど、お願いいたします。

ごあいさつ

平成18年がスタートし、新しくなった教科書が中学校で使用されるようになりました。当社の教科書も旧版のイメージを大きく刷新したものとなりました。それに基づき、当社と採択校を結ぶ機関紙として、この「虹」を発刊するに至りました。学校と教科書発行会社との意見交換の場としていきたいと願っております。また、当社の教科書をご理解いただくために、関係者の方にも配布いたします。これより、年4回発行してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。



発行

株式会社 扶桑社

書籍編集部 (教科書事業担当)

〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1

TEL 03-5403-8899

E-Mail kyokasho@fusosha.co.jp

URL <http://fusosha.co.jp/kyokasho/>